

はんにゃしんぎょう
『般若心経』について (七)

野口圭也 (種智院大学客員教授)

Ⅲ. 『般若心経』の内容について (4)

7. 「諸法空相、不生不滅、不垢不淨、不増不減」について

「諸法空相」の部分は、サンスクリットと漢訳で少し文が異なっています。漢訳を素直に読むと、「諸法の空の相は、不生・不滅、不垢・不淨、不増・不減である」となります。ここで言う「法」とは、「存在しているもの」という意味です。もろもろの存在しているものが空である、その空のあり方(様相)が、不生・不滅などである、ということです。

一方サンスクリット文では、「すべての存在しているものは、実体が無いということ(空性)を特質としている」と述べています。「特質」と訳したサンスクリット語の「ラクシャナ(lakṣaṇa)」という言葉は、何かあるものを「そのもの」として特徴付けるものを意味します。「しるし」「象徴」「特色」などとも訳されます。

すべての存在しているものが、実体がないことを特質としている。その時にどうなるのか、ということをお説いたのが、続く「生じることなく、滅することなく」という文です。漢訳では「不生不滅」の主語は「空相」であるように理解され得ますが、サンスクリット語では「すべての存在しているもの」が主語です。

私たちの日常の経験の世界では、様々なものに対して、生じたとか滅したとか、きれいだと汚いとか、不足しているとか足りているとか、様々な判断を行い、評価を与えています。しかし「智慧の完成」の「空=実体がない=実在していない」という立場から見ると、それは空っぽの缶詰の中身のように実在しないものに対して、きれいとか汚いとか、不足とか満杯とか言っているに過ぎません。「実体がない」ものは「真に」生じることはない。それらは「生じた」ように見えても、実体的なもの、実質あるものとして「生じた」ものではないので、滅することもまたないのです。テレビの画面上に何か写っているときに、私たちはそれを見て「ある」と思い、画面から消えれば「なくなった」と認識しますが、それは画面上で写ったり消えたりしているに過ぎません。それに対して執着を起こすのは愚かなことです。いずれにせよ電源を切れば消えてしまうのですから。智慧の完成の立場から見ると、私たちが実際に目の前に「ある」と思っているもろもろの存在もまた、テレビの映像のように真に生じたものではなく、中が空っぽの、実体の無いものなのです。

8. 「無」である諸々のもの

続いて「[すべての存在には]実体がないという状態においては」、世間世俗の存在も、仏教の教理上の真理も、どちらも「無い」ということが説かれます。ここで「無い」ものとして列挙されているのは、次のようなものです。

- ① 五蘊(私たちの身心を構成する5つの要素) : 色・受・想・行・識
- ② 六根(6つの感覚器官) : 眼・耳・鼻・舌・身・意(もの思う器官としてのころ)
- ③ 六境(感覚器官の6つの対象) : 色(色かたち)・声(音声)・香(香り)・味・触(触感)・法(心でおもうこと)
- ④ 十八界(六根と六境に感覚器官に基づく6つの認識を加えた、18の存在の原要素) : 眼界~眼界、色界~法界、眼識界・耳識界・鼻識界・舌識界・身識界・意識界
このうち、②と③を合わせて「十二処」と言います。感覚器官とその対象のことです。

「処」とは領域・分野を意味します。十二処に6つの感覚器官に基づく6つの「識」を加えたものが④の「十八界」です。「界」とはここでは「原要素」のことです。これらの存在の範疇を「五蘊・十二処・十八界」と総称しますが、初期以来の仏教の存在論においては、これらのみが存在するものとされました。

しかし『般若心経』では、これら五蘊・十二処・十八界は、すべてが全部、「実体が無い」と言っているのです。これらは人間の肉体と精神活動のすべて、つまり迷いの世界に属するものですから、仏教においては斥けられるべきものだ、というのは分かります。しかし『般若心経』で否定されるのは、そのような世俗的存在に止まりません。以下のような仏教教理の根幹もまた、実在するものではない、とされているのです。

- ⑤ 十二縁起（12の原因と結果の連鎖）：仏教の根本教理は「縁起」です。原因があって結果が生じる。では私たちの生存を規定する苦の原因は何か。それは真理に対する根本的な無知（無明）である、とつきつめて、最終的に12の支分からなる、次のような原因と結果の連鎖を考えました。

無明（根本の迷い、真理に対する無知）→行（意志、こころの指向性）→識（認識、判断）→名色（名称と形態、認識の対象）→六処（6つの感覚器官）→触（感官と対象の接触）→受（感受）→愛（渴愛、欲望）→取（執着）→有（輪廻的生存）→生（誕生）→老死（年をとり、死ぬこと。根本的な苦）

- ⑥ 十二縁起の各項目の止滅：⑤の様に、苦しみの根源である「老死」に至る原因を考究し、最終的な原因として「無明」にたどりつきます。原因を滅してしまえば結果も止滅する。従って、「老死」という苦から解放されるには、原因である「無明」を滅すれば良い、ということになります。これが「無明盡」「老死盡」です。

- ⑦ 四聖諦：これもまた仏教教理の根本。苦諦（すべては苦であるという真理、四苦八苦）・集諦（苦の原因という真理、渴愛）・滅諦（苦の滅という真理、涅槃）・道諦（苦を滅する道という真理、八正道＝8つの正しい生き方）という、「4つの聖なる真理」。

- ⑧ 智：真理を知ること。サンスクリット語の「ジュニャーナ(jñāna)」は、智慧の意味もあれば、ただ単に何かを知ることの意味もあります。「すべては実体が無いので、何かを知ることにはない」と理解することも可能ですが、次の「得」との対応を考慮して「真理を知ること」と訳しました。「智慧（宮元訳）」「智（立川訳）」などと訳されています。中村・紀野訳では、「知ること」と訳して「知るはたらき、さとり智」と注に記しています。

- ⑨ 得：涅槃を得ること、悟りに到達すること。サンスクリット語の「プラープティ(prāpti)」は「獲得、到達」の意味です。ここも単に「何かを得ること」とすることも可能ですが、初期経典においては「得」の語は涅槃などの最終的な境地を修行者が獲得する意味である、という研究のある（福田琢氏「初期経典に見られる“得”の用例」『印度學佛教學研究』40-1）ことから、「涅槃を得る」意味で解しました。これに対応して、⑧の「智」もまた、真理を知ることであると理解できます。

これらはいずれも、仏教においては肯定的な価値をもつ要素です。仏教徒は普通、縁起の理法を理解してお釈迦様の悟りの内容と言われる四聖諦を追体験し、迷いの無い涅槃の境地に到達するために、日々修行に励んでいるのですが、それらも皆、「実体がないという状態においては、無いのだ」と言って、すべて実在を否定してしまいます。